

size proteins may be related to the persistent signal intensity increase on brain MR images of patients with history of repeated administration of linear GBCAs.

12. 口腔扁平上皮癌の予後予測における¹⁸F-FDGおよび¹⁸F-FAMTPETの有用性

金 舞^{1,2}, 樋口 徹也², 中島 崇人²
ブトゥリ アンドリアナ², 平澤 裕美²
徳江 梓¹, 栗原 淳¹, 対馬 義人²
横尾 聡¹

(1 群馬大院・医・口腔顎顔面外科学・
形成外科学)
(2 群馬大院・医・放射線診断核医学)

【背景と目的】 L-3-[¹⁸F]-fluoro- α -methyltyrosine (FAMT) は、L 型中性アミノ酸であるチロシンの¹⁸F ポジトロン標識薬剤である。われわれは、口腔扁平上皮癌における半定量的パラメーターの予後予測における有用性について検討した。【材料と方法】 術前に PET 検査 (¹⁸F-FDG, ¹⁸F-FAMT) を施行した 160 人について、腫瘍原発巣における SUVmax, 腫瘍全体の大きさや広がりやを反映する metabolic tumor volume (MTV) と total lesion glycolysis (TLG) を計測し、それぞれの全生存率および無増悪生存期間について比較し検討した。【結果】 単変量解析の結果、DFS や OS において年齢や性別、FDG (MTV, TLG), FAMT (SUVmax, peak) を除いた因子において有意差を認めた ($P < 0.05$)。多変量解析の結果、DFS においては、病理組織学的浸潤度および FDG SUVpeak が、OS では N 因子および FAMT の MTV が有意差 ($P < 0.05$) を認め、本統計から独立した予後因子であると考えられた。【考察と結語】 今回群馬大学歯科口腔・顎顔面外科にて PET/CT 撮影を行った口腔扁平上皮癌患者 160 例を対象に、生存分析を行い臨床統計および PET 画像を用いた腫瘍代謝評価について、予後因子となりうる項目について報告した。本検討の結果、口腔扁平上皮癌の DFS において病理組織学的浸潤度 INF と FDG SUVpeak が、OS において、リンパ節転移の有無と FAMT MTV が独立した予後因子であることが示された。

13. 口腔頸部領域に生じた壊死性筋膜炎の診断における LRINEC-OC score の開発と有用性の検討

小川 将, 清水 崇寛, 栗原 淳
牧口 貴哉, 横尾 聡
(群馬大院・医・口腔顎顔面外科学・
形成外科学)

【背景と目的】 Oro-cervical necrotizing fasciitis (OCNF) は筋膜や皮下組織の広範な壊死を特徴とする頸部軟部組織の細菌性感染症である。OCNF では頸部の解剖学的特徴から比較的容易に縦隔や大血管などに波及し致死性になる。その治療の根幹は早期の外科的デブリードマンと創部の開

放であるため、早期診断が極めて重要である。しかし、発症初期には蜂窩織炎との鑑別が困難な症例も少なくない。今回われわれは、当科で経験した OCNF 症例と文献から検索した報告例を対象にプール解析を行い、初診時の血液検査所見に顎口腔頸部領域に特有の理学的所見を加えた新たな OCNF の補助的診断ツールを考案したので報告する。

【材料と方法】 2010 年 1 月～2016 年 12 月までに当科で治療を行った OCNF 症例 7 例に文献より検討が可能であった 21 例を加えた OCNF 群 28 例と同期間に当科で経静脈的に抗菌化学療法を 72 時間以上施行した重症 cellulitis 群 121 例の計 149 例を対象とした。両群間で統計学的検討を行い LRINEC-OC score を算出した。【結果】 CRP, WBC, Cr, 頸部皮膚の発赤, 前胸部皮膚の発赤の 5 項目が独立因子として抽出され ($p < 0.05$)、OCNF 発症の予測因子と判断された。ロジスティック解析の結果をもとに OCNF の発症予測スコアとなる LRINEC-OC (laboratory risk indicator for necrotizing fasciitis of oro-cervical region) score を考案した。Score が 6 点以上の moderate risk, high risk の症例を OCNF の可能性が高いと判断して、対象の 149 例に対して ROC 曲線による判断分析を行った。その結果、Sensitivity は 85.7%, Specificity は 93.4%, AUC は 0.900 であった。【考察と結語】 LRINEC-OC score は顎口腔頸部領域の壊死性筋膜炎の早期診断に有用であった。

14. 皮膚筋炎患者の筋炎と間質性肺炎の評価における FDG-PET の有用性について

藤原千紗子¹, 茂木精一郎¹, 関口 明子¹
原 健一郎², 樋口 徹也³, 平澤 裕美³
小平 明果³, 朝永 博康³, 対馬 義人³
石川 治¹

(1 群馬大院・医・皮膚科学)
(2 群馬大院・医・呼吸器・
アレルギー内科)

(3 群馬大院・医・放射線診断核医学)

【背景と目的】 皮膚筋炎患者では、診断後早期に筋炎や間質性肺炎の有無や程度、悪性腫瘍の有無を確認することが治療や予後を考える上で重要である。筋炎や間質性肺炎の有無・程度を調べるために、MRI, CT による画像検索や CK, アルドラーゼ, KL-6, CRP, フェリチンなどの採血を行っている。また、悪性腫瘍の有無を調べるために、CT, FDG-PET, 腫瘍マーカーなどを調べている。そこで、今回我々は筋炎や間質性肺炎の有無・重症度の評価における FDG-PET の有用性について検討した。【材料と方法】 初診時 (治療前) のほぼ同時期に FDG-PET と胸部 CT もしくは四肢 MRI を行っている皮膚筋炎患者 22 症例において、悪性腫瘍の検索で行われた FDG-PET/CT の SUV 値を用いて、CT の間質性肺炎, MRI の筋炎との相関や検査値の比較を行った。【結果】 肺病変の活動性の評価における FDG-PET の有用性について検討した結果、HRCT